



那須野ヶ原から

西村 格

去年八月、急に転勤となり、住み馴れた羊ヶ丘を後にして早くも五カ月が過ぎようとしています。常任理事の仕事を中途で放棄しなければならなかったのは、残念であると同時に、皆様に非常にご迷惑をかけることになり、申しわけなく思っている次第です。

さてこの五カ月、関東地方を見て感じたことは、私が十三年前、関東を離れ、仙台・札幌と歩いている間に、関東地方の自然環境は非常に悪化したということです。特に栃木県はひどいのですが、昭和三十

十七年には、那須野ヶ原の周辺にも広大な自然草地在り共有牧野として残されています。那須町だけを見ても二千七百ヘクタールほどの牧野があったわけですが、いまこれは「観光開発」という名のもとにゴルフ場、分譲別荘地、レジャーランドに変わり牛や馬の遊んでいた自然草地の姿はほとんどなくなっていました。しかも、別荘地は単なる投資の対象として伐採整地され、切り売られた造成地は、荒れるにまかせているのがほとんどです。観光産業はここでも地元の産業の育成には役立っていません。まして、土地を手放した地元の人々の利益にはなっていないようです。

周辺の山々も、土壌業者の利益だけのために工事がはじめられたような、塩那スカイライン、雪も降らないのにリフトだけ造っている霧降スキー場など、北海道では想像もつかないような悪どいやり方で破壊が進んでいます。大きく騒がれた美ヶ原のビーンズラインも、実質的にはできていないようなものでした。地元の観光業者が自由に牧場の中をジープで客の送り迎えをしており、その輸立からの裸地化は、航空写真には全く道路と同じに写ります。いま、しっかりとした土地利用計画をもとに規制しなければ、どうにもならないところまで来ているというのが実感です。

北海道自然保護協会も、全道の自然保護団体と歩調をあわせ積極的に、北海道の自然保護に動くべき時期だといえましょう。大規模林業圏構想やトムラウシダムの計画には単に地元という立場ではなく、もっと広い視野から積極的に反対していただきたいと希望します。(那須・草地試験場)

新しき年に思うこと

谷井 保子

「徒然草」の第一段に「いでやこの世に生れては願はしかるべきことこそ多かれ」とありますが、人間の常、あれこれ思い巡らしての日々です。北見というはじめの土地に暮らして三カ月、慣れることの忙しさに追われた四十九年の暮、新しい年を迎え精神的に「自分の部屋」を持ちたいという希望が頭をもたげます。

今年には「国際婦人年」東京でも種々の行事が開催される予定、改めて女性の地位につき考えてみたいものです。第二次世界大戦後、女性の地位の著しい向上が行われたにもかかわらず、今日では世界全体で後退

がめだつており、この際、女性のおかれている状況を確かめてゆく必要があります。私なりに地道に女性の歴史をひもどき、社会的な条件で女性の能力が開発されなければならぬことをあらゆる場で発言、社会の全般的な改革のために輪をひろげたいと思います。今年には地方選挙の年、選挙権の行使とともに、女性のひとりひとりが社会生活に真に参加すること、一例として厳しい経済情勢の変化の渦中であって、日々の生活がしにくくなっていることを感じているのは女性、冷静に根源的なことを掘り下げるべきと思います。

次に、地元の状況を早く知りたいことです。オホーツク文化圏として華々しく学園都市づくりのスローガンを立て大学の誘致運動、そして公害の出さない企業づくりに熱意を持っているように見受けられますが、現実に住んで良かつたという気持ちに住民が浸れるかということです。今年には例年になく大雪とかで、街のあちこちに相当の期間大きな雪山が横たわり、交通渋滞を呼んでいたことから推し、長い冬の生活の雪に対する姿勢に乏しいことを特に感じました。住民が安心して、冬の生活を楽しいものとしておくれる環境づくりを真剣に考えたいものです。

近辺にはまだ沢山の自然が残っており、

空気も大都会にくらべ澄んで空もきれいですが、近くの常呂川は周知のとおり、すでに水銀でおかされております。このかけがえのない自然を人間活動と調和した保護のため、この地区の自然保護協会々員と連携を保ち、一人でも会員を多くし、自分の生活する場所の現実をふまえた環境づくりの大切さを実践したく思います。

日本が現在おかれている経済的状況から推し、第一次産業の重要性を農業、林業に支えられているこの市で、改めて考えさせられております。
(北見市在住)

白い中から

菊地 隆 司

この土地に移り住んで六年目、今年もまた閉ざされた季節がめぐって来た。海も湖も山もすべて白一色の世界になろうとしている。毎年の四季そして移り変わりの季節同じ頃、同じ自然に接していても一向に飽きることなく、かえって年毎に自然に対する思いの深まるのは、住む者としての愛着だろうか、それとも年のせいだろうか。

旅行者の多くは名の知れた原生花園目当てにこの辺りを訪ね、その中のごく一部の人々が裏海湧と呼ばれるところへも足を延ばす。原生花園の名前に慣れ写真や絵葉書で、または以前の切手にみる道東の名所目指してその場所を降り、その附近だけを見て歩いて終る人が多い中、少しでも自分の足で近辺を歩き、みまわし、足もとに目を落とし耳を澄ましてゆっくりと自然に浸り、日の出を仰ぎ落日を確かめ夕映えに染まったあと満天の星を数える後姿をみるとき、たつぷりと受けとめた旅の重みも私もまた分け与えられた思いになる。

附近に人工的なものは何もない自然、海と湖と山と川、ぜいたくなお膳立ては何物にも汚されることなく、その季節季節を讀ませてきた。

これが大漁で賑わった同じオホーツクの海とは信じられない冬の流水、この雪の原に幾百もの白鳥がやってくるとは想像もつかない湖、雪だけのあと砂丘がよみがえり、そこに色彩りどりの野生の花が乱れ咲き、草原には数知れない野鳥が生活を営む自然の神秘。

旅兄ちゃん旅姉ちゃんと子供たちの呼ぶ若者の中から、この自然に魅せられてそれぞれの観察や研究を重ね深めてゆく人たちが何人か生まれた。彼らは大切な時間とお

金をかけて、何度も何度もやってくるのだ。このあたりがこのまま変わらぬようにとの願いは彼らにとっても当然であり、それ以上に住民としては切実な願いでもあるわけで、その願いが即、原生花園と海湧湖の自然をそのままの姿でまもることにつながるものと単純に考えていた。その中で、最近思いがけない風潮のきざしがみえて来たのだ。それは郷土の自然保護を強化するためとの表向きの理由は説かれているが、経済的な利益を求める心が自然を愛する心につながるものかどうか、ひそかに懸念せずにはいられない。それは字名変更、ひいては国鉄駅名を変更するという動きなのだ。現在の「浜小清水」を「原生花園」に代えてしまうことに対しては、この土地ならではの大切なものを、そのまま葬ってしまふような感傷にも似た気持ちにならざるを得ない。

清水から受ける、つつましかな道東の一方のひびきはすでに感じられない」と。現代のといわれる初対面の若者の心を知りこんな純粋な人たちのためにここに住む者として、せめてはこの一帯の自然がそこなわれないための、できるだけ努力はなすべきだとの思いを新たにしたいのだ。

他方また一つ。建物の附近、敷地内の植物が年毎に変化していることにふと気付き「五年前にはただの草原だったのが、最近、柳に似た木が生えはじめているのは？」と聞くと、居合わせた博識の若者に「植物の、それは遷移という現象で、このままにしておくとこのあたり、柏か何かの雑木林になる」と教えられた。折りから二、三頭の羊のためにその草原を牧草地にと考えていた矢先、果たしてどのようにすることが自然のためによい結果になるのかと、愚かな迷いを持つことにもなった。

ちなみにシーズン・オフの旅人の何人かにそれとなく問いかけてみた。浜小清水について「小清水の中の浜小清水、きつと海の近くにある静かないい所なのだろう。そこには有名な原生花園もあると知り、はるばるやって来ました」「では、もし地名や駅名が原生花園に変わったら？」との問いには「ズバリそのもの、そこには花盛りの派手な光景は連想するけれど、いまの浜小

にとどめさせてしまおう。

はじめにあった自然の姿よいつまでもこの願いをこめて、開所当時から毎朝の起床時に流しつづけてきた合奏協奏曲の「四季」だったが、盤がすり切れ何枚も新しいものに変えるたのしみがこの先ずつとつづくようにと、心から祈らずにはおられない。

(中山記念小清水ユース・ホステル)

カメラ狂の考えること

大木敏嗣

先日、半年ぶりに札幌に行き、久しぶりにカメラをかついで市内を歩きました。札幌へは、もう両手では数えきれないくらいにお邪魔していますが、カメラを肩に市内をまわったのは、まだ二、三度目です。そして、歩きながら特に強く感じたことは、

札幌の歴史を伝える明治時代の建物がこの先どうなるのか……ということでした。

特に私のような「写真狂」にとっては、ただ単に「建物それ自体のみが保存されればいい」という考えは、まさしく「狂気の沙汰」なのです。建物は、やはり周囲の景

観とマッチしてはじめて、その美的存在が浮き彫りにされるのだと思います。その端的な例が、道庁の赤レンガでしょう。新庁舎ができる前の赤レンガは、前庭の花や池と相俟って、典型的な北欧ムードをかもし出し、まことに札幌的な、写真の画材としては他に類をみないものでした。パッタに新庁舎のはいるいまでは、なんとしても興ざめです。

同様のことを今回の訪札で、時計台に対しても強く感じたのです。時計台を正面にして、左側面のアングルは、市役所の大きな図体が、どうしても視角にはいつてしまします。右側、つまり交差点側から狙えば緑の木の葉と青い空をアタセントに、白い時計台の、その白さが、ますます生きてくるのです。あのパッタに、もし北国のぬけるような青空のかわりに、コンタリートの固まりが侵入して来たら、もはや時計台は写真的には全く魅力のない存在となってしまうでしょう。

もちろん、だからといって私は、近代ビルを毛ぎらいするつもりは毛頭ありません。それにはそれなりの「美」があります。ただ、時計台の、青空をパッタにした、あの白さを、いつまでも札幌の象徴としておいてほしいのです。赤レンガの二の舞いを踏まないで下さい！ 札幌よ、永遠に札幌

たれ!

(埼玉県在住)

こなかったキジ

藤巻 裕蔵

わが家に初めてキジが姿を現わしたのは一昨年の冬であった。初めは畑に残ったササゲを食べていたが、そのうちになれてきて、ペランダ前につるしたトウモロコシを食べるようになった。私の家は美唄の住宅街にあり、一〇〇メートルほど西には函館本線が走っているようなところであるが、キジは二羽で毎日やって来た。去年の冬もやはり二羽がやってきた。しかし今年はまだ一羽もやってこない。

キジの狩猟が解禁になった十一月二十一日美唄で、庭先に餌に食べにやってきたキジがハンターに射たれるという出来事があった。わが家にやってくるはずだったキジも、途中でやられたかもしれない。「農家の屋根に散弾がバラバラ」という新聞報道も美唄でのことである。また私の同僚が試験場で調査をしていたところ、数人のハンターが現われ、ここは危険だからと言っ

て調査中の彼を追いたてたこともあった。ハンターにとって鳥獣保護区や銃猟禁止区域といった禁猟区以外は、すべて猟区なのだろうか。

狩猟シーズンが始まると新聞投書欄には、きまってる現在の狩猟のあり方に対する批判がのる。それへの答は、農林業上有害な野生鳥獣の生息数を調節し、人間生活を守るため、狩猟は必要であるということである。スポーツとしての狩猟に、なぜこのような理由づけをしなければならないのだろうか。ハンターの増加に伴う質の低下もあるであろうが、有害鳥獣駆除とは異なるスポーツ狩猟に前記のような理由づけをしようとするところに、美唄でおきた出来事の根本的な原因がありはしないだろうか。一步ゆずり、スポーツ狩猟の主要目的が生息数調節にあるとしても、それを達成するには、猟期前に対象動物の生息数調査を行い、その結果に基づいて捕獲数を定めるべきであろう。これは、野生動物管理のゆきとどいた国々ではすでに行われている。

狩猟を趣味とする人もいれば、野生動物を見ることを楽しみとする人もいるのである。住宅街にもキジが姿を現わし、このような人々の目を楽しませてくれるよう願うものである。

(道立林業試験場)

国道三六号線バイパスの 農業試験場内通過に反対 する

山 本 正

札幌市郊外羊ヶ丘にある北海道農業試験場の精密試験圃場を、北西から南東によこぎる国道三六号線バイパス計画が立案されたのは昭和四十年代も初めの頃である。日本経済の高揚期を背景にして立案されたこの計画路線ほど、時代の流れを写し出しているものはないと思う。

農地を侵蝕して工場を建て、農業従事者を吸収して工場労働者にすることで拡大しつづけた高度経済政策は国民に輝かしい未来を約束した。当然、到来するであろう車社会を見越して、バイパス計画はしかれた。

崩壊する農業を当然と見認する政策立案者には、農業を支えている試験研究機関は無用の長物、少なくとも試験ができなくなっても、社会的影響はないものと写っていたにちがいない。そうだからこそ、試験研究をするうえで最も大切な精密圃なんのためらいもなく、三六メートル幅のバイパス

を書き入れることができたのだ。

高度経済政策がもたらすであろう数々の行きすぎをあらかじめ予想し、それを抑制して、調和ある進歩を求めることは、本来醜なことかもしれない。その意味では精密圃場を横断するバイパス計画もあるいは許せるのかもしれない。しかし、それから十年、結果が万人の目の前に示されて、その見直しが、特に農業について強く求められているときに、十年前の計画をそのままの形で提示して、その実現をせまる行政当局のその料見がわからない。

農業に関する試験研究に全エネルギーを投じて、迫りくる食糧危機に対する社会的責任を果たしたいと念じているわれわれに、反対のためのエネルギーを使わせないですむようにはできないものだろうか。

(羊ヶ丘自然愛好会会長)

“自然ということ”

駒 井 勉

現代のわれわれの都市生活にとって、いまや最も必要な環境の要素は「太陽と緑と

静けさ」であると、ある外国の都市計画家は早くからいつている。

この言葉は、いまのように自然破壊も甚大でなく、工業の発展間もない頃ならば葬られそうな言葉であるが、現在においては人間の基本的・生理的条件と結びつくことなしに考えられないがゆえに重要な意味をもっている。ここにいう太陽とは、何ものからも遮られることのない直接的な太陽の日ざしそのものであり緑とは、季節には常に色濃く、新鮮な酸素を供給してくれる街路樹や公園のことであり、そして静けさとは、騒音などにより害されることなく、安眠できる状態を意味するものと思われる。

私は一年ほど前まで神奈川に居住していたのであるが、住まいのあった場所は、これらの要素とは、まるで縁遠い状況にあつたといつてよかつた。太陽の光は大気が汚染されたことにより常に遮られ、数少ない街路樹は車の排気ガスによつて痛めつけられ、秋でもないのに黄色くなり、そして国道と近くにある飛行場は、昼に限らず夜までも騒音を提供してくれたのである。ましてや、工業地帯の近隣に生活する人々のことは推すべくもない。

私は雨上がりの朝を待ち受けたものである。なぜならこのようなときは、空はじつに清く青く、緑はさらに緑に、そして新鮮

な空気をいっぱい吸うことができたからであり、加えて美しい富士山を見渡せたとし、夜などは、田舎で、山で見たのと同じように多く星をみるのが楽しみだったからである。小さな木や草花が、蘇生する感を持つたのもこのときである。差こそあれ都市に生活してきた者の、まさに実感ではなかるうか。私は山登りが好きだとはいへ、息抜きのために、よくあちこちの山に出かけたものである。

戦後における工業至上主義、さらに近年の高度経済成長は、そこに働く、居住する人々の健康を無視して発展してきた結果、種々のいわゆる公害といわれる諸現象を現出させたのである。大気・水質の汚染、農業・食品・騒音の公害……、そして自然破壊である。この現在の工業発展のし方と、われわれ人間の動物的・生理的要求とは都市において、いまやまったく調和の限界を越えているといつても過言ではないだろう。これらの状況は、直接的にあるいは間接的に、われわれの肉体と精神を日常的に浸食するばかりでなく、自然界のすべてのバランスを崩している原因なのでもある。

たとえば、植物と人間との共存関係である。自然破壊によつて緑が減少し、あるいは車公害によつて街路樹が枯れていく。日に何十リットルもの空気を吸うといわれる

人間の肉体にとつて、汚れた空気を吸うことの弊害は明らかであり、それはすでに実証済のことである。百害はあつても、一利もないのである。

周知のことだが、植物は同化作用によつて空気中の炭酸ガスを吸収し、われわれの必要な酸素を供給してくれる。逆に人間はその逆作用をすることによつて緑との共存関係は一面的だが、維持できるのである。ドイツのある学者の研究によれば「自然に成長した五十年のブナの木一本は、四家族の人々が必要とする酸素量を供給する」というのである。このデーターをもとに、都市における大樹の数が何人に一本の割合であるかを算出するのは、興味あることである。

公害を除去し、自然を保護することは、われわれのためばかりではなく、将来に生命をつなぐ子孫への、よりよい環境を残すべき責任が課せられているからでもある。そしてまた、自然がいまに生きるわれわれにのみ与えられた財産でもないからなのである。自然と共存することは、最も肝要なテーマであろう。

いまや自然破壊は日本全土に及び、その現在を見るも無残である。九州における大崩山、志布志湾、四国における石鎚山、山陰における大山、紀伊における大台ヶ原、

関東における南アルプス・スーパード林道、ミズバシヨウの美しい尾瀬沼、日本の霊峰ともいわれる富士山、首都圏の安息的秩父多摩、日光の塩部スカイライン、東北におけるむつ小川原湖、八幡平、男鹿半島……であり、北海道においては、この地の屋根であり代表する大雪山、そして苫小牧東部開発など、すでに破壊され、あるいは、されつつある地域は非常に多い(全国自然保護連合発行の「自然は泣く」を参照されたい……この本は、破壊の現状を如実に訴えている)。

かかる中で自然保護運動は、国の自治体の緩慢な行政というよりも、むしろ産業優先の中で破壊を推進してきた行政を思うとき、急務な課題として反対運動を広げていかなければならない。大雪縦貫道路も一時は阻止し得たものの、いつまた頭をもたげるとはわからない。全国的には自然に恵まれているとはいへ、破壊がはじまれば、それは一夜にして無残な姿に変わるのである。

いま残されている自然を維持、回復するために多くの人々を誘い、運動を拡大し、行政が真に道民のための行政として、保護運動を先どりするまでこの斗争は持続させねばならない。外国には行政が中心となり幼児期から自然の大切さを教育の中に織り込んでいく例がいくつもあつる。(札幌市在住)